
Last tear

川嶋紗矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last tear

【Nコード】

N3712F

【作者名】

川嶋紗矢

【あらすじ】

あたしは世界最後の人魚だった。 孤独、恨み、喪失感、憎しみ、愛、絶望、怒り、…と書くと大袈裟かもしれませんが、まあ大体そんな話です。

1・記憶が戻ったら（前書き）

今回二作目の小説です。まだまだ未熟者ですが、精一杯頑張るので、よろしくお願ひします！ご感想など頂けたら嬉しいです。

1 . 記憶が戻ったら

深い海の中。

美しい歌声。

透き通った青の中に
光が揺れる。

誰？

誰かが泣いてる。

あなたは誰？

どうして泣いてるの？

「…い…るい…！」

頭上から、聴き慣れた声が降ってくる。

「…んもお、うるさいなあ…」

あたしは目を閉じたまま、うめき声を漏らした。

「るい！！起きろって！おい！寝るな。」

「はいはい…。」

そう返事しながらも、あたしはなかなか動かなかった。

朝は苦手だ。

カーテンを開ける音がした。

目を瞑っていても、朝日の光が部屋に差し込んできているのが分かる。

「もお…カーテン開けないでよ。まぶしい…。」

「いい加減目え覚ませ。」

「もう起きてるよお。」

あたしは重たい瞼をようやく開いた。

目の前には今までの声の主である伶がいた。

「やっと、起きたか。早く着替えて降りて来い。」

伶っていうのは

あたしの兄。

伸びっぱなしの茶色っぽい髪に、ちょっと目つきの悪そうな切れ長の目。

だらしなくポケットに片手を突っ込んで、もう一方の手は頭をかきながら、欠伸をしている。

あたしはひとつ上の兄が別に嫌いじゃない。

伶は、口うるさくて、空気も読めないし、頭もそんなに良くないけど、面倒見がよくて、結構優しい兄だと思う。

でも、ちょっと過保護すぎるというか、妙に絡んでくるし、正直うざいことも。

「伶。」

「ん?」

「着替えるから出てって。」

「ああ、そ、そうだったな。は早く降りて来いよ。」

そう言ってあわてて部屋を出て行く伶の後ろ姿が、ちょっと笑えた。

それより、
どうなんだろう。

いくら兄といえど、妹の部屋に無断で入るなんて。

何度も入るなど言ってるのに、伶は毎朝あたしを起こしにくる。別に頼んでもないのにいい迷惑だ。

伶は、兄というより、お母さんという感じで、そこがまたうつつとっしかりたりする。

少し前に友達のゆかに言われて気づいたのは、うちの兄のような部類の人間は、

世間一般ではシスコンと呼ばれていること。

ほんと、どうにかなんないかな…伶の奴…。

あたしは、ため息をひとつ零して、部屋をあとにした。

階段を降りてく途中、焦げ臭いにおいが鼻をついた。

リビングに入ると、キッチンに伶の姿を見つけた。

「おはよう。」

「応毎日あいさつはする。」

「じゃなきゃ、あとから五月蠅いし。」

「はよ。パンとご飯、どっち？」

伶が全く似合わないエプロン姿であたしに訊く。

「…ご飯。」

本当は何も食べたくなかったけど、食べないとあとから五月蠅いし。

そんなことより、やっぱり何かが焦げ臭い。

まあ大体予想はつくけど。

「ねえ、さっきからなんかこげ臭いんだけど。」

あたしの言葉に、伶の肩がほんの一瞬だけ揺れた。

「ん？そうか？俺にはよく分かんないけどなあ。」

「……………」

あやしすぎ。

あたしは、冷蔵庫の中から牛乳を取り出しながら、横目でチラッと伶のほうを見た。

そのとき、あたしの目に映ったのは、黒い煙がもくもく出ている真っ黒い何かが入ったフライパン。

「何それ。」

「これ？いやあ、これ一応ハンバーグだったんだけど、さすがにちよっと焼きすぎたな。」

伶は情けなさそうに苦笑いながら、茶碗にあたしのご飯をよそった。

「はい、ご飯。」

「ありがと。…伶、前から言ってるけど、別に無理して家事とか…」
伶があたしの言葉を遮る。

「これは、俺がやりたくてやってんだから、気にすんなって。お前は余計なこと考えなくていいから、な？」

「でもさ…」

「大丈夫だって。もう少ししたら、親父達も帰ってくるから。心配すんな。」

そう言って伶は、味噌汁の入ったお碗を持っている手とは反対の手で、あたしの頭をグシャグシャとなでた。

違うのに。

あたしは、伶のことを心配してるのに。

うちの親は2人も、あたしもあまりよくは知らないけど、海外のあちらこちらで働いているらしい。

伶が前にそう言った。

あたしは、なんじゃそりゃと思いつつも、あまり深くは追求しなかった。

なぜなら、2人のことは全然覚えていないから。

前に伶に写真でみせてもらったことがあるから顔は知っているけど、話したことは多分ないと思う。

だから、うち

「市川家」は今あたしと伶の二人暮らし。

でも、あたしは伶がいつでもそばにいてくれたから、寂しいと感じたことは一度もなかった。

「ボサボサだな。」

しばらく俯いていたあたしの顔を除きこんだ伶がプツと吹きだした。

「伶のせいじゃん。」

あたしは相変わらず俯きながら言う。

そして、また可愛くない言い方をしてしまったと反省する。

「お前はさあ、いいかげん、お兄ちゃんって呼べよな。」

あたしの頭に手を置きながら、伶はため息混じりにそつつぶやいた。

返事に困ったあたしは、それが聴こえないふりをした。

「…いただきます。」

「シカトかよ。」

あたしは、仕方なくあいまいな返事をした。

「…記憶が戻ったら呼ぶよ。いつになるか分かんないけど…。」

あたしがそうつぶやいたとき、一瞬、伶が苦しそうな顔をした気がした。

その表情がなぜかあたしの胸をギュツと締め付けた。

けど、伶はすぐにいつもの優しい笑顔で言った。

「だったら、気長に待つしかねえな。」

その言葉に、あたしは胸が少しだけ軽くなるのを感じた。

そして、ふと、さつき見た夢のことが思い出された。

「そういえば、あたし、変な夢見た。」

「変な夢?」

「うん。海の中で、誰かが泣いてた。」

「……………」

「あと、きれいな歌。」

気づけば、伶の箸の動きが止まっていた。

それから、伶の表情が固まっていた。

「伶？」

名前を呼ぶと、またいつもの伶に戻った。

「ああ、ごめん。で、それがどうしたんだ？」

「別に。ただの夢なんだけど、なんとなく気になるだけ。ほら、やっぱり、記憶なくす前のことかもしれないしさ……。」

あたしは、心配かけないように、なるべく明るく言った。

しばらく見つめていて目があうと、伶はニカッと笑った。

「そっか。まあゆっくり思い出せ。」

そう言って励ましてくれるいつもの伶の笑顔に、あたしは少し安心した。

あたしには、一年以上前の記憶がない。

一年前、あたしは自分の名前すらも覚えていなかった。

両親のことも、伶のことも、何もかも思い出せなかった。

でも、伶が教えてくれた。

あたしは、

「るい」「って名前で、伶の妹だということ。

伶はいつも

「ゆっくりでいいからな。」と、記憶のないあたしをいつも励ましてくれた。

記憶をなくした理由は、精神的なストレスがどうのこうのと、どこかの医者が言っていた。

一体、記憶をなくす前のあたしは、どれだけ病んでいたのだろう、思い出すのが少し怖い。

だから、伶の優しさも時々あたしを不安にさせる。

あたしの過去に何かがあつて、だから優しくしてくれるのではないかと。

伶には絶対に言えないけど、あたしは伶が本当はあたしの兄じゃないことに気づいてる。

伶や伶の親との血のつながりも多分ない。

でも、あたしは伶のことをずっと本当のお兄ちゃんのように思ってる。

「お兄ちゃん」なんて呼んだことはないけど、あたしには伶が必要だから。

2・お願い

うちから学校までは
徒歩15分。

あたしは、伶と同じ高校に通ってる。

偏差値もあまり高くない結構自由な学校。

記憶喪失のあたしでも簡単に入れた。

とは言っても、あたしもそんなに馬鹿だったわけじゃない。

記憶をなくしても、計算の仕方とか、日本語とかは覚えてたみたいで、その辺の子と変わらないくらいの学力はあった。

けど、社会だけは最悪だった。

歴史も地理も経済も政治も本当にひどかった。

多分記憶を失くす前から社会の成績だけはかなり悪かったんだと思う。

なんで社会だけなのかはよく分かんないけど。

「おっはよー!!」

聴き慣れた声にふり向くと、そこには朝からハイテンションなゆかがいた。

「おはよ。」

あたしはいつものようにあいさつを返したが、ゆかはあたしのあいさつなどまるで聞いてないようで、なにやら辺りをキョロキョロ見回している。

「…どうしたの？」

あたしは恐る恐る訊いてみた。

「今日、伶さんは？」

ゆかは真剣な目であたしを見つめて、答えを待っている。

「さあ…。あたしにはちよつと分かんないかな。」

「なんで？兄妹でしょ？」

「いやあ、兄妹だからってさ、一緒に登校とかはないでしょ。」

あたしのツツコミにゆかはしおれた花のようにしゅんとなった。

「そんなあ…。」あたしの親友

「南野由香」は、あたしの兄

「市川伶」に、片思い中だ。

それは、あたしとゆかが出会った頃くらいかららしい。

あれから、もう1年以上も経っている。

「ゆか、まだ伶のこと好きだったの？」

「何それ。早く諦めれば？って言いたいわけ？」

「そんなんじゃないよ。あたしはただ…。」
話してる途中でゆかは更に強い口調で言い返してきた。

「言っとくけど、るいがいくらお兄ちゃんとられたくないって言うてもね、日本の法律じゃ兄妹は結婚できないんだからね！！分かってる？」

「け、結婚って、そんなの、ありえないから！！」
あたしは明らかに、ゆかの言葉に動揺してた。

そんなあたしをゆかは疑うような目つきで見てる。

「どーだか。るいと怜さんの関係はみんな疑ってるし。」

「何それ!？」

「どういう意味?」

「そういう意味でしょ。るいはともかく、怜さんはモテモテなんだから。そりゃ、噂にくらいなるでしょ。るいも気をつけないと、えらい目に合わされるよ。」

ゆかは、あたしにまるで小学生と話してるかのように言う。

あたしは、そんなゆかの態度にちよつと膨れた。

「えらい目って…なんであたしが。」

「ほんと、るいは分かってないんだから。噂が広まれば、怜さんのこと好きな子に何されるか分かんないってことよ!」

「そんな、大袈裟な。」

あたしは、笑いながら、ゆかの言葉を否定した。けど、ゆかはあくまで真剣に話してる。だから、あたしはちよつとだけ怖くなった。

伶がモテるのは分かってたけど、ここまでとはあたしは予想もしてなかった。

「ほんと、るいはのん気でいいわね。」
ゆかが呆れたようにつぶやいた。

「あたしからしたら、ゆかだって……」
「あ!!そうそう言い忘れてた。」
またしてもあたしの言葉はゆかの声に遮られた。本当にゆかは、人の話をきかない奴だ。

「ねえ、るい。まだ先のことだけど、夏休みにさ、海行かない?」
ゆかは目を輝かせながら言った。

でも、あたしにはその目が何かを企んでいる目としか思えない。

あやしい。

「いい。行かない。」
あたしはきつぱり断った。

「なんで?行こうよ、海い。あおいも来るんだよ?」

「あおいも?」

「そ。どうするっ?」

あおいっていうのは、あたしのもう一人の友達
「一ノ瀬葵」のこと。

美人で頭もよくて、おまけに優しくとってでもいい子。

だから、あたしもゆかかもあおいが大好きだ。
そのあおいが行くときいてあたしは思いとどまった。
けど、やっぱりあたしの答えは変わらない。

「行かない。

伶がうるさいし。」

「だったらさあ、伶さんも一緒に行こうよ！ね？」

…なんだ、
そういうことか。

結局ゆかは伶がねらいつて訳。

「最初から、そう言えばいいでしょ？」

「…バレた？」

「友達だしにするなんてサイテー。」

「怒らないでよ、るい。ね、お願い。ゆか、この夏にかけてるの！
！」

結局あたしはゆかの熱意に負けてしまった。

「まあ、分かったよ。一応言ってみる。」

「ありがとう。
るい大好きいー。」

ほんとわざとらしんだから…。

ゆかは、本気で怜のことが好きだった。

あたしは、そんなゆかがちょっとだけ羨ましかった。
ゆかはいつも真っ直ぐだ。

あたしにはまだ、誰かを好きになるってことが、よく分からなかった。

だから、恋をして、一生懸命なゆかが羨ましかった。

あたしは、怜のどこがいいのかは分からないけど、
「上手くいくといいな」と本気で思ってた。

3 ・ そつでもないよ

「あおい!

おつはよー!」

教室に着いて、あおいの姿が見えると、ゆかはすかさずあおいに飛びついた。

「おはよう。」

びっくりしながらも、ニッコリと笑ってあいさつを返すあおいはやっぱり今日もきれいだった。

「るいも、おはよう。」

あおいに見とれていると、あおいは振り返ってあたしにもあいさつをしてくれた。

あたしはハッとして、あおいにあいさつを返した。

「おはよ。」

「ゆか、

今日はごきげんだね。

何かあったの?」

いつも以上にハイテンションなゆかに気づいたあおいが、ちょっと小声であたしにそのわけを訊いてきた。

「んー、多分海のことだと思っけど。」

「海？ああ、伶さんも来ることになったの？」

さすがあおいは鋭い。

「まだ、分かんないんだけど、ゆか、もう舞い上がったって。」

あたしは横目でゆかを確認しながら、困ったように言った。

「これは、なんとしてでも、伶さんに来てもらわなきゃ、ゆか、シヨックで寝込んでしまうかも。」

「だよ…。」

自分のことを言われていると気付いたのか、ゆかが目を吊り上げてこちらに向かってきた。

「ちよつと2人ともニヤニヤしながら、何話してるの？」

「ニヤニヤって。」

あたしは苦笑いしながら、あおいの方に目を移した。

「ちよつと、るいに恋の相談されちゃってね。その話してただけだよ。」

「え！？ほんと!？」

ゆかが驚きながら、あたしの方へ身を乗り出した。

「ちよ、ちよつと、待って。違うよ！あたし、好きな人なんていない！変なこと言わないでよ、あおい!！」

あたしは、あおいの言葉を理解するのに時間がかかって、否定するのがちょっと遅れてしまった。

「そんなに、照れなくたっていいのに。」

「照れてない!!」

あおいが、とても意地悪な笑顔を浮かべている。でも、その笑顔がまたものすごくきれいで、あたしはまた見とれてしまう。

「で、誰？るいの好きな人。」

ゆかが興味津々な目であたしを問い詰める。

「だあかあら!!」

「いないの、そんな人！」

あたしの強い否定にゆかは不満そうに言う。

「ほんとにい？誰がいるでしょ、誰か！」

「誰かって誰よ。」

「んー、……………」

「やっぱ、いないじゃん。」

「ねえ、本当にいないの？好きな人！」

面白くなさそうに同じ質問を繰り返すゆか。

「しつこいなあ。いないって言ってるでしょ。」

期待はずれなあたしの言葉に、ゆかはひどくがっかりしたようだった。

た。

「そつだ！あおいは？」

何かを思い出したように、ゆかはおおいにあたしと同じ質問をぶつけた。

「好きな人、いないの？」

それは、あたしも結構気なる。

あおいに好かれる男は、ありえないくらい幸せものだと思う。

「いるよ。」

あまりにも、あっさりとおおいが答えるから、あたしとゆかは啞然としてしまった。

正直、あたしみたいに、何が何でも

「いる」なんて言わないと思ってた。

きつと、ゆかもそう思ってたはず。

「だ、誰？」

とりあえず、それが誰なのかが気になった。

「それは、秘密。」

あおいは、にっこりと笑って、そうあたしたちに告げた。

「えー。」

「いいじゃん。教えてよ。」

「そつだよ。ここまで、言ったんだからさ。」

あたしとゆかは口々に不満を漏らす。

「いや。」

あおいは、相変わらずさつきと同じ意地悪な笑顔。

「でもさあ、あおいに好かれるなんて、その人、幸せものだよね。」

あたしがそうだった瞬間、あおいの意地悪な笑顔が一瞬、ものすごく悲しそうな笑顔に変わった気がした。

「それでもないよ。」

「え？」

「…ん？ううん。なんでもない！」

あたしは、あおいのつぶやいた言葉が気になった。

もしかしたら、あおいはその好きな人と何かあったのかな。

だったら、あんまりしつこく聞き出すのもなんか悪い気がした。

キーンコーンカーンコーン

ちょうどそのとき、チャイムが鳴って、担任の先生が教室に入ってきた。

「やば。じゃ、また、あとでね。」

ゆかはおわてて自分の席に帰っていった。

あたしは、あおいのすぐ隣の席だからあわてずに済んだ。

「おはようございます!」

先生の元気のいいあいさつが教室に響く。

「今日は、なんと、うちのクラスに転校生がやってきました!」
先生の突然の言葉に教室は騒がしくなる。

「転校生だつて。」

あたしはざわめきにまぎれて小声であおいに話しかけた。

「みただね。こんな時期にちょっと珍しいね。」

あおいはなんだか嬉しそうに言った。

確かに、一学期のど真ん中の時期に転校生なんてちょっと変だ。

ゆかの方に視線を移すと、ものすごく期待している目で、転校生のお出ましを、今か今かと待ち構えているようだった。

「静かに!」

先生の力強い一声で騒がしかった教室が一瞬で静まりかえった。

「では、佐伯君、中に入ってきてください。」
先生がドアに向かって告げた。

ゆっくりとドアが
開かれる。

転校生の姿が見えると、みんなはまた騒ぎ出した。

転校生はそれに動じることもなく、教壇に立つと自ら自己紹介を始めた。

「佐伯勇です。

よろしく。」

にっこりと笑ってあいさつをする転校生は整った顔立ちをしていた。一見ハーフのようにも見える。

「えっと…、それじゃあ、佐伯君、後ろの空いてる席に座って。」

「はい。」

先生に席を案内され、転校生は静かに席についた。

彼の席はあたしの隣だった。

教室のざわめきがまだ治まらない。みんな、こっちを見ながらこそと内緒話をしていたり、騒いだりしている。よく見ると顔を赤らめている女子も数名いた。

「静かに！」

先生の本日2回目の怒鳴り声で、再び教室がシンとなった。

「それでは授業を始めます。…市川さん。」

「はい。」

咄嗟に返事をした。

「今日一日だけ、佐伯君に教科書見せてあげてくれないかな？」

「…あ、はい、分かりました。」

内心ちよつとやだった。

あたしは初めて会った人と話すのは苦手だ。

隣の佐伯君に視線を移すと、いきなり目が合ってしまった。

すると、彼は笑い出した。

噴出したような小さな笑い声に、あたしはちよつと怒りを覚えた。人の顔見て、いきなり笑うなんて失礼にも程がある。

しかも、今日初めて会ったばかりなのに。

「…あたし、そんなに面白い顔してますか？」

嫌味な転校生になるべくあたしの怒りが伝わるように引きつった笑顔と低い声で言った。

「ごめん、ごめん。別に君の顔が面白かったからってわけじゃないよ。」

当たり前だ。

「じゃあ、なんで笑ってたんですか？」

笑いながら謝る彼に、あたしはひねくれたように言った。

「それより、早く机くつつけて。俺、教科書ないと困るから。」
何様のつもりじゃあああああああという心の叫びを、あたしは必死でこらえた。

言われた通りに机をくつつけて、その中央に教科書を開いて少し乱暴に置いた。

「で、佐伯君、さっきなんで笑ってたの？」

あたしはまださっきの怒りがおさまってなかった。

「名前、間違ってるし。」

返ってきたのは予想外な答えだった、というより答えではなかった。

「…え、だってさっき、佐伯勇ですって自己紹介して…」

「違う。そうじゃなくて、本当の名前。」

意味が分からない。

名前にホンモノもニセモノもあるなんて。偽名ってこと？

あたしは、しばらく啞然としていた。

なぜか、彼もあたしと同じように啞然としているように見えた。

「ルシア・プラチド。」

それが俺の名前。」

彼が落ち着いた声で静かに言った。

「外国人？」

ちよつと馬鹿にしたような言い方をしてしまった。

でも、彼はそんなことなど全く気にしていないみたいで、なにか信じられないといった表情を浮かべている。

「…き、君、もしかして記憶喪失？」

声が上手く出てこない。

頭の中にはなんで？という疑問しか浮かばなかった。

「…な、なんで、知ってるの？」

「やっぱり…。記憶、ないんだ。」

確かにあたしには一年以上前の記憶がない。

もしかして佐伯君は、一年以上前のあたしのことを知っている？

でも、なんで佐伯君が…？

「あたしのこと、

知ってるの？」

声が震えているのが分かった。

「少しだけ。」

「教えて！あたしは誰！？あたしはどこの誰で、今何歳で、何をしていた？あたしは…」

必死だった。

「市川さん？どうしたの？」

先生の声で、我にかえったあたしは、思ったより大きな声でさっきの言葉を叫んでいたことを知った。クラスのみんながこっちを驚いた目で見ていた。

「…すみません。」
恥ずかしくて、どうしようもなく、とりあえず謝った。
あちらこちらで小さな笑い声が聞こえた。穴があったら入りたいと
はこのことだった。

「話の続きはまた放課後に。」
ニコリと笑う佐伯勇の笑顔にあたしはどうしても敵わないみたいだ。
本当は今すぐ訊きたいことがたくさんあったのに、素直に承諾して
しまった。

でも、これでやっと分かる。

あたしの過去、

伶との関係、

あたしが本当は誰なのか…

4 . 1111111111

「るい、帰ろ。」

待ちに待った放課後、
教室にはもうあたしとゆかとあおいと佐伯君の四人だけしか残って
いなかった。

「ごめん。あたしまだちょっと帰れないから、先帰つといて。」
両手を顔の前で合わせてゆかに謝る。

「なんで？今日追試あつたっけ？」

「追試つて…。あたし追試に引つかかったことなんて一度もないよ。」

「じゃあ何？」

…やっぱりゆかには誤魔化せない。

本当のことを言わなければ、ゆかは何が何でも教室を出ないつもり
だ。

無理やり追い出してもきつと、教室のドアに耳をピタリとくっつけ
て盗み聞きでもするに違いない。

あたしは、覚悟を決めた。

「…佐伯君と2人きりで話したいことがあるの。」

一瞬時間が止まった気がした。

「え！？ええええええええええええええええ！？」

ゆかの叫び声が
教室中に響く。

「ちょっと、ゆかうるさいよ。」

「だって、な、なんで？もうそんな仲！？」

「そんな仲ってどんな仲よ。もおいしいから、早く帰って。」

あたしはゆかの背中をドアの方まで押していく。
けど、ゆかも引き下がらない。

「あおい、今の聞いた？るいってばゆかのこと、邪魔者扱いして。」

あおいを味方につけようとするゆか。

けど、それは失敗に終わった。

「ゆか、もう帰ろう？今日はジヨルディに迎えに来てもらって、ついでにゆかも送ってくから。ね？」

あおいはそう言つと、ゆかの鞆を抱えて教室を出ようとドアの方へ向かった。

「ほんと！？ジヨルディさんが？」

「そ。だから、早く帰るよ。ジヨルデイ、もう校門で待ってるみたいだから。」

「OK。今行きます！」

ゆかはおう、あたしと佐伯君とのことはどうでもいいみたいで、あおいのところに駆けていった。

ちなみに、ジヨルデイというのはあおいの執事。

名前の通り、外国人らしい。

確かヨーロッパ系の人だったはず。

彼はゆかにかなり気に入られている。

あたしが思うに、ジヨルデイは確かにきれいな顔をしているけど、無口であり笑わない、何を考えてるのか分からない人物だ。

ただ、あおいのことは誰よりも大事に思っているみたいだった。多分ジヨルデイさんはあおいのことが好きなんだと思う。あくまで推測だけど…。

教室の窓から真っ黒い車に乗るあおいとゆかの姿が見えた。

ジヨルデイさんは、相変わらず無表情でゆかのくだらない話を聞いている。

それがなんだかおかしくて、あたしはひとり笑いをしてしまった。

「やっと、2人きりになれたね。」

「!?!」
後ろを振り返れば、佐伯君が、からかうような笑顔であたしを見ている。

「早速だけど、話始めるね。」

あたしは、心の準備を整えた。

「…うん。お願い。」

よく分からない緊張が迫ってくる。

そんなあたしの心とは裏腹に、佐伯君は落ち着いた声でゆっくりと話し始めた。

「実は俺、市川さんに会ったの今日が初めてなんだよね。だから、詳しいことはよく分からない。」

「待つて。それじゃあ、なんであたしのこと…。」

「それは今から話すよ。とりあえず聞いててもらえる？質問は後で受け付けるから。」

「うん…。分かった。ごめん、続けて。」

佐伯君は再び話を続けた。

「俺はただ君のことを噂で聞いただけなんだ。生き残りの人魚がいるって。」

「人魚？」

聞いていてと言われたのに、勝手に口がつぶやいていた。

「そう。人魚。世界最後の人魚、それが君。ユエ・エレット。」

佐伯君はなぜか少し誇らしげに言った。

あたしが人魚？

ありえない。

どっかのおとぎ話じゃないんだから、人魚なんて存在するわけない。

…佐伯君は、ただ、からかっただけだったんだ。

あたしは、本気で自分の正体を知りたかったのに。

本当の自分を受け止める覚悟も出来てた。

それなのに、彼はあたしを馬鹿にした。

人魚だなんて、変な作り話までして…。

許せなかった。

「ふざけないで。あたしがいくら記憶がないからって、いいかげんなこと言わないで！あんたがそんな人だとは思わなかった！」

あたしは、佐伯の馬鹿やローにそうはき捨てると、自分の鞆を引っ張って、教室を走り去ろうとした。

「待つて！」

咄嗟に左腕をつかまれた。

「離して！触らないでよ！馬鹿佐伯！」

必死に振り放そうとするけど、彼の手はあたしの左腕を全く離そうとしない。

「俺は嘘なんかついてない。全部真実だよ。」

いまだに嘘を突き通そうとする彼にあたしは呆れた。

「記憶がないから、何でも信じるとでも思ったの？」

自分でもびっくりするくらい冷たい声で言った。

ため息が聞こえた。

「俺の言葉が信じられないのなら、それでもいい。でも、見たところ、市川さんにはもう時間がない。一刻も早く記憶を取り戻した方がいい。それでも、運命は変わらないと思うけど……。」

「何言ってるの？時間がないってどういうこと？運命って何？あたしはあたしの何を知ってるの！？」

気がつけば、あたしは取り戻した冷静さを再び失っていた。

頬に冷たい感覚が走った。

わけもなく、
ただ涙が出てきた。

時間がない。

運命は変わらない。

そう言われて、目の前が真っ暗になった気がした。

別に、彼の言葉を信じてるわけじゃない。

でも、あたしは怖くて仕方がなかった。

“すべてを失ってしまう”、直感的にそう思った。

「俺が知ってるのは、人魚のユエ。彼女はある呪いによって人間になった。そして、今ここにいる。」

彼の言っていることはあたしには理解できない。

なのにそのときあたしは絶望の中にいた。

過去を思い出したわけじゃないのに、懐かしい感覚があたしの胸を締め付ける。

ふいに夢で見たきれいな海の映像が頭をよぎった。

「…海。」

「ユエ…？まさか思い出したのか？」

「ん…」

頭が割れるように痛い。

痛みがどんどん増してゆく。

だめ…壊れ……

「い、いやああああ。」

深い海の底。

「ユエ！？どうした！？ユエ！？」

一人の少年の姿。

少年の名は

「ゼノ…。」

ゼノ・ルロワ。

5 ・ 思い出しても

部屋中に香りよいコーヒーの匂いが充満する。

「砂糖は入れるか？」

リビングのソファに腰掛けている少年に訊く。

「要りません。」

そっけないいつもの返事に俺は苦笑した。

「ゼノ、お前、ほんと可愛くない奴だな。」

「何度言ったら分かるんですか。僕はゼノじゃない。」

リビングから冷ややかな声が返ってきた。

「そうだった、そうだった。えーと、瞬だっけ？お前の偽名。」

キッチンから運んだコーヒーカップをリビングのテーブルに静かに置く。

「で、何？話って。」

あまりいい話ではないと分かってたから、俺はわざと明るい声で言った。

「ユエのことです。」

俺はコーヒを飲みながら、こいつの話を静かに聴くことにした。

「今日、クラスに転校生が来ました。名前は佐伯勇。そして、本当の名はルシア・プラチド。魔界では天才魔術師と呼ばれていました。」

「天才魔術師？魔界の人間なのか。」

ゼノは静かに頷いた。

「魔界で彼の名を知らぬ者はいません。」

「で、そいつがどうかしたのか？」

「彼はユエの過去を知っています。そして、今日早速、ユエとの接触を図っていました。もしかすると、今頃ユエは、もうすべての記憶を取り戻しているかもしれません。」

落ち着いているゼノの様子に俺は少し疑いを感じた。

「その佐伯って奴がるいにバラしたかもってことか。」

「…しかし、彼の目的がイマイチよく分からない。」

ユエに記憶を取り戻させて、彼に一体どういったメリットが…。」

ゼノはだんだん独り言のように話すようになってきた。

「そんなことより、いいのか？るいが全部思い出しても。」

俺はるいの過去をゼノから教えてもらったが、それはあまり幸せな過去ではなかった。

だから、るいに記憶が戻った時、るいがどんな反応を示すのか俺には想像もできない。

「伶。あなたはいいのですか？ユエがすべての記憶を取り戻したら、あなたの嘘がバレてしまう。」

何を考えているのか分からないゼノの目が、俺をジッと見つめた。

僕には関係ありませんが…と言いたげな笑みを浮かべながら、コーヒーを口に運ぶ。

「その覚悟ならとっくの昔にできてる。それに、るいはもう気付いてる。俺達が兄妹じゃないことに。」

俺は、るいから色々問い詰められたりはしないが、最近なんとなく俺達が兄妹じゃないことに、るいはもう気付いている気がする。

「ならいいんですがね…。」

ゼノが意味深な声でつぶやいた。

「僕は、今のユエが、自分の過去をすんなり受け止められるほど強いとは思えません。」

俺は、ゼノの一言一言が矛盾している気がしてならない。

「だったら、なんで無理やりにも、佐伯からるいを引き離そうとしなかったんだ？」

るいに記憶を取り戻してほしくないのなら、佐伯がるいの過去を知っていることを分かっていたなら、そうすることも可能だったはずだ。

ゼノは黙ったままで、俺の質問に答える様子はない。

「それに、魔界の奴らは何をするか分からない。るいが人魚ってことをそいつが知ってんのなら尚更だ。なのに、なんでお前はるいをそいつから守ろうとしないんだ!？」

ゼノに対する苛立ちが隠しきれない。

「守る必要はありません。彼は確かに天才魔術師ですが、人間界での魔術の使用は、魔界の掟で堅く禁じられています。それに、彼は優秀な魔術師の中でも唯一、人魚狩りに参加しなかった男です。更に、ユエはもう人魚ではないし、今更人魚がどうこうと言ってもどうにもならない。」

ゼノの弁解を聞いていても、俺はだんだん心配でたまらなくなってきた。

もう少し早く気付くべきだったのかもしれない。

こんなことなら、一緒に帰ってくればよかった。

「るいは、今どこにいる」

「聞いてどうするのですか？助けにでも行くつもりですか？先ほどから言っように、その必要はありません。」

その言葉を合図に、俺はゼノの胸ぐらを掴み、今にも殴りだしそうな勢いで怒鳴りつけた。

「ごたごたうるせえんだよ。るいは今どこにいる！？さっさと答え！！」

ゼノは俺から目を反らすと、俯きながらつぶやいた。

「怜。僕は…、あなたに隠していることがあります。」

俯いたまま話し始めたため、表情が上手く読み取れない。

といっても、こいつはいつも、何を考えているのか分からない。

「今はそんなこと、どうでもいい。とにかく俺はるいのところに行く。」

もちろん、るいの居場所は分からない。とりあえず、俺は学校に向かうことにした。

玄関に向かおうとした途端、ゼノに道を阻まれた。

「なんのつもりだ。ゼノ。」

「怜、落ち着いて下さい。ユエは大丈夫です。」

平然と言つてのけるゼノ。

「いいから、そこをどけ」

俺の怒声にもゼノは全く動じない。

「ここにいて下さい。すべてを話します。」

ゼノは断固そこを動かさないつもりだ。

だが、何のためにそこまでするのか分からなかった。

例え俺がるいのところへ行つたとしても、ゼノには何も迷惑はかけないはずだ。

「なんで、そこまでして俺をるいのところへ行かせない…？お前はるいのことは、どうだっていいのか？」

「ユエがどうなるかと僕には関係ない。僕にはユエを守る義務なんてありませんから。ただ…」

ゼノの無神経すぎる一言に、俺は理性を失った。

何か割れる音が部屋に響いた。

多分それは
コーヒークップ。

俺は、ゼノを思い切りぶん殴った。

割れたカップから流れ出ているコーヒーが、フローリングに茶色いシミを作る。

ゼノは壁に近かったせいか、思い切り頭をぶつけたみたいだった。

俺は自分のやったことがすぐに理解することができなくて、ただ呆然としていた。

ゼノは頭を抱えながら、小さなうめき声を漏らしている。

「…ごめん、ゼノ。」

俺はゼノに一言謝ると、足早に玄関に向かった。

正直あそこまでするつもりはなかった。

ゼノの言ったことも、よく考えれば本心じゃないことくらい分かる。るいがどうなってもいいなんて、ゼノは絶対に思わない。

根拠はないけど、そういう奴だと俺は思ってる。

あんなことを言ったのも、何か訳があるに決まっている。

だけど、俺はゼノほど冷静ではいられない。

るいのことが絡むと余計落ち着かない。

心配でたまらなくなる。

だから、どんなに可能性が低くても、るいに危険が近づいてたら、俺は真っ先にいるいのところへ向かう。

それが、家族として当たり前のことだ。

それに、もう誰も失いたくない。

今度こそ守んなきゃならない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3712f/>

Last tear

2010年10月10日06時26分発行